


読書推進運動

No.679

- ★「上野の森親子ブックフェスタ」開催(2頁)
- ★「第63回 全出版人大会」開催(5頁)


 公益社団法人
読書推進運動協議会
 〒101-0051
 東京都千代田区神田神保町1-32
 出版クラブビル6階
 TEL 03(5244)5270
 FAX 03(5244)5271
 発行人 佐々木 泰
 編集人 片岡 伸子
 定価 60円

会員の購読料は
 会費の中に含まれる



すべての子どもの未来を拓く

多様な子どもたちの読書機会の確保

国立国会図書館国際子ども図書館館長

うわばよしえ
上保佳穂

国立国会図書館国際子ども図書館は、国立の児童書専門図書館として、「子どもの本は世界をつなぎ、未来を拓く」という理念の下、さまざまな活動に取り組んでいます。その際、関係するみなさまとの連携・協力は欠かせません。当館では、子どもの本と読書に関わる諸機関・団体とともに、子どもの本と読書に関する最新動向の報告や意見交換を行う「子どもの本と読書に関する懇談会」を毎年開催しています

で、読むことに困難のある多様な子どもたちも含まれます。令和元年に成立した読書バリアフリー法では、「障害の有無にかかわらず全ての国民が等しく読書を通じて文字・活字文化の恵沢を享受することができるとの社会的実現に寄与すること」が謳われ、国の第五次子ども読書活動推進基本計画では、「多様な子どもたちの読書機会の確保」が基本的方針のひとつとされています。

懇談会では、学校図書館や公共図書館による、多様な子どもたちそれぞれの状況やニーズに応じた読書支援活動の現状や取組が紹介され、読書バリアフリーに関する専門性のある人材育成が課題であり、研修の充実が求められること、バリアフリー資料を知

る機会を増やすことが重要であること、障がいの有無に関係なく大人も子どもも楽しめるアクセシブルな本の出版が期待されること、今後ICTを踏まえた取組が必要であることなどの意見が交わされました。

国際子ども図書館では、点字・大活字などの児童用各種バリアフリー資料を所蔵し、閲覧室に拡大読書器などを備え、だれもが使いやすい図書館を目指しております。また、約14万点の外国語の児童書を所蔵しており、日本語を母語としない子どもたちの読書も支援しています。さわる絵本や洋書も含む、バリアフリーへの理解を深める資料を揃えた学校図書館セットを貸し出し、読書バリアフリーに関する

オンライン研修なども開催しております。ICT活用という点では、国立国会図書館の取組として本年1月から本格稼働した「みなサーチ」があります。全国の公共図書館や点字図書館のアクセシブルな資料を検索でき、ジャンル別検索で「児童書」に絞り込むことや、視覚、聴覚などの機能別の検索も可能です。また、みなサーチで利用者登録すると、DAISYやテキストデータをダウンロードして利用できます。登録対象は、視覚障がいその他の理由で通常の活字の印刷物の読書が困難な個人や図書館などの施設で、学校図書館の登録も増えています。多くのアクセシブルな資料に近づく手段として、読書機会の確保につなげていただければ幸いです。

国際子ども図書館は、今後も読書推進に力を尽くされているみなさまと連携・協力して、すべての子どもたちが読書する機会を得られ、未来を拓く一助となるよう、取組を進めてまいります。



★上野の森 親子ブックフェスタ★



2日間、いつでも会場のどこかでイベントが！

5月4日(土)・5日(日)、東京都台東区の上野恩賜公園で、「上野の森親子ブックフェスタ2024」(主催：子ども読書推進会議/日本児童出版協会/一般財団法人出版文化産業振興財団)が開催された。昨年に引き続き2日間の開催だったが、好天にも恵まれ、家族



イベントテントでは、読み聞かせだけでなく手品やライブも開催

今年にはレジでのオペレーションの合理化をさらに進め、会計待ち時間も短縮。さらに休憩テントも用意するなど、熱中症対策も行い、大きなトラブルもなかった。5月5日には連携イベントとして、国立国会図書館国際子ども図書館で講演会『生成AI「チャットGPT」と学校教育・図書館の未来を考える』を開催し、約133名が参加。東京大学名誉教授の佐藤字さんが生成AIの真の在り方と、

28500人が訪れた。催事のメインである、謝恩価格での児童書販売「子どもブックフェスティバル」には、65社・者が出展。絵本、児童書を中心に約42700冊が会場内に展示され、2日間の売り上げは3300万円に上り、前年比104.8%となった。

連れや保育・教育関係者、インバウンドの多様な国籍の来場者など昨年の26300人を上回る約28500人が訪れた。



あちこちでサイン会が開かれていました



会場には、多くの人がつめかけました

紙の本との共存をどのように果たしていくか、また「わが国の学校図書館・公共図書館がどのようにあるべきなのか」についての講演を行った。タイムリーな内容であり、参加者は熱心に聞いていた。そのほか、各出版社ブースでの著者サイン会や関連イベントも数多く行われ、講談社の「おはなし隊」キャラバンカーも出動。バラエティ豊富なコンテンツに、上野の森に子どもたちの歓声が響く2日間となった。



出版社・者のテントは熱心に本を探す人でいっぱい



箱の中身は全部子どもの本！



おはなし会がない時間は、おはなし隊キャラバンカーで自由に本が読めます

クラウドファンディング あたたかいご支援、 ありがとうございました！



そして、X (旧 Twitter)
はじめました

公益社団法人 読書推進運動
協議会では、4月20日から5月
24日まで、「こどもの読書週間」
「読書週間」の安定した継続を目
的としたクラウドファンディン
グを実施し、37名の方より合計
30万2000円のご支援をいただ
きました。あたたかいメッセージ
とともにご支援くださったみなさ
ま、クラウドファンディング情報
拡散のご協力をいただいたみなさ
ま、返礼品のポストカードにイラ
ストの使用を許可してくださった
ザ・キャビンカンパニーのおふた
りに、厚くお礼申しあげます。
目標額には届きませんでした
が、あらためて、「こどもの読書



読書推進運動協議会公式 X
(旧 Twitter) QR コード

週間」「読書週間」の歴史や意義、
当協議会の事業を知っていただ
くよい機会になったと思います。
ただし、依然として財政的な危
機は続いており、事務局では今回
の経験を踏まえて、再度挑戦した
いと考えています。クラウドファ
ンディングへのご意見、体験談な
どをいただくと、幸いです。
クラウドファンディング実施に
伴い、読書推進運動協議会は公式
X (旧 Twitter) アカウントを開
設しました。当会は「読書週間」「こ
どもの読書週間」「若い人に贈る
読書のすすめ」「敬老の日読書の
すすめ」などの当協議会の事業紹
介、都道府県立図書館および関係
団体のイベント情報、野間読書推
進賞受賞者の活動などを中心に、
投稿します。事務局がSNSに不
慣れで人手不足でもあり、フォ
ローしている図書館・団体の投稿
のチェックが不十分で、会員社の
フォローも進んでおりません。み
なさまのご理解とご協力をお願い
申し上げます。

■第29回 日本絵本賞

日本の風景・自然を感じる作品と、 パワーにあふれた絵本が受賞

公益社団法人、全国学校図書

館協議会(全国SLA)は、「第
29回日本絵本賞」について、4
月16日(火)に最終選考会を実施し、
2023年に出版された絵本より
選ばれた最終候補絵本30点(うち
翻訳絵本12点)より4点の受賞作
を決定、5月15日(水)に発表した。

●第29回日本絵本賞大賞

『ゆうやけにとけていく』

ザ・キャビンカンパニー／作(小
学館)

●第29回日本絵本賞

『おぎにいりのしろいドレスをき
てレストランにいきました』
渡辺朋／作、高島那生／絵(童心
社)

『かぜがつよいひ』

屋田弥子／作、シゲリカツヒコ／
絵(くもん出版)

『どんぐり』

『ゆうやけにとけていく』は5名
の最終選考委員の評価が一致して
高く、文句なく大賞に選ばれた。

だんだんと沈みゆく夕陽がすべ
ての見開きに描かれ、時の流れと
ともに、畑、プール、公園、街
角、縁側、風呂などを舞台にした
人々の営みが詩情豊かに描かれて
いる。最後の見開きで訪れた静か
な夜の風情からは、古きよき日本
の地方都市の面影を感じる。現代
の子どもたちが、この作品で描か
れるようなゆったりしたやさしい
時間を過ごしていることを願って
しまふ。

『おぎにいりのしろいドレスをき
てレストランにいきました』は、
ドレスにケチャップがついたとい
う

『かぜがつよいひ』は、しりとりと
とシニールな絵柄で不思議な切迫
感を読むものに感じさせる。
『どんぐり』は、晩秋から春にか
けての森における静寂と、小さな
生命の躍動をなんとも美しく表現
する。日本の里山の環境変化がい
われてひさしい。おとなたちにも
読んでほしい絵本である。

今回、日本絵本賞翻訳絵本賞は
該当作がなかったが、『ものがた
りがうまれるとき』(評論社)な
ど魅力的な作品も複数あった。
表彰式は7月29日(月)、城西国際
大学紀尾井町キャンパスで行う。



日本絵本賞大賞を受賞した
『ゆうやけにとけていく』



日本絵本賞最終選考会の様子

■日本児童文芸家協会 各賞贈呈式

子どもの心に届くかを つねに問いながら、作品と向きあおう

一般社団法人 日本児童文芸家協会は、5月17日(金)、東京都千代田区の東京消防庁スクワール麹町にて、「2024年度 児童文化功労賞・協会賞・新人賞贈呈式」を開催した。

●今年度の受賞作・受賞者

【第48回 日本児童文芸家協会賞】
天川栄人『セントエルモの光久 閑野高校天文部の、春と夏』、『アンドロメダの涙 久閑野高校天文部の、秋と冬』(講談社)
【第53回 児童文芸新人賞】
山下雅洋『鈴の送り神修行ダイアリー』(岩崎書店)



壇上に並んだ今年の受賞者みなさん (撮影：御堂義兼)

【第63回 児童文化功労賞】

黒柳徹子(女優・ユニセフ親善大使) 長野ヒデ子(絵本作家・紙芝居作家)

受賞者あいさつで天川さんは「子どもたちに希望や未来を語るのがむずかしい時代。たくさんの方がそのひとつになれたら」と願いを述べた。山下さんは、作家になれなかったらと思っていたところ、「小学生の息子に『ほんとうに書きたいものを書いたら、その人はもう作家』と真顔で言われた。子どもは手ごわい。そんな子どもの心に届くような作品を書いていきたい」と語った。

長野さんはいろいろな出会いと失敗を重ねるうち、「知らないうちにこの仕事をしていた」と、ご自身の絵本に登場するようなエピソードをいくつも披露。黒柳さんは、「この仕事は子どもに見せることができるかと問いながら仕事をしてきた。この賞をいただき、その考えに間違いがなかったと思つた」とメッセージを寄せた。

■日本児童文学者協会 各賞贈呈式

仲間との出会い、合評会が 受賞作品に結実

一般社団法人 日本児童文学者協会は、5月24日(金)、東京都千代田区の出版クラブホールにて、「2024年度 児童文学者協会文学賞贈呈式・表彰式」を開催した。

●今年度の受賞作・受賞者

【第64回 日本児童文学者協会賞】
ひこ・田中『あした、弁当を作る。』(講談社)
【第57回 日本児童文学者協会新人賞】
水風紅美子『けものみちのにわ』(BL出版)

【第28回 三越左千夫少年詩賞】
松山真子『迷子』(四季の森社) ・特別賞
永窪綾子『しまくれねご殿』(私家版)

ひこ・田中さんは、子どもの世界に大人社会の問題が反映される様子を描く作品がここ数年増えてきたとし、「その流れに背中を押されてこの作品を書いた。売れるかわからないテーマの作品を出してくれた出版社に感謝」と述べた。水風さんは、ひとりでの創作に行きづまって、児童文学者協会の

通信講座を受講。同人の合評会で大きな刺激を受け、「この作品も合評会でいろいろな人に意見をもらった。自分の好きな物語を一心に書いていきたい」と語った。松山さんも、児童文学者協会の合評会、勉強会に積極的に参加したことにより、「自分が学びたいこと、知りたいことが全部あった」と、同人や講師への感謝を述べた。永窪さんの受賞作は出版準備を進めていたが、出版社の倒産によつて私家版で刊行。通販サイトで市場に出る道が開けたと報告、喜びを語った。

■日本絵本賞

ポップ交流サイトを開設

公益社団法人 全国学校図書館協議会(全国SLA)は、6月中旬より「日本絵本賞ポップ交流サイト」を開設した。

このサイトでは、第29回 日本絵本賞(本号3ページ参照)の最終候補絵本30点を対象に、好きな絵本を紹介するポップを募集。応募作品はサイトに掲載され、「いいね」をつけたら、学校の授業で鑑賞するなど、絵本を通じて実践の広がり期待されている。

また、全国SLAでは、ポップ交流サイトを活用した実践校60校を募集。実践校には、日本絵本賞受賞絵本と最終候補絵本のセットを寄贈し、絵本読書啓動を展開し、ポップを投稿してもらう。

交流サイトでは、ポップの投稿と閲覧のほか、日本絵本賞最終候補絵本リスト、実践校の募集要項と応募フォームなど詳細が確認できる。

●日本絵本賞ポップ交流サイト
<https://ehon-pop.j-sla.or.jp/>



左から、ひこ・田中さん、水風紅美子さん、松山真子さん、永窪綾子さん

■第63回全出版人大会

「公にする」出版の使命を
これからもはたすと再確認

ゴールデンウィーク明けの5月7日(火)、東京都千代田区のホテルニューオータニで「第63回全出版人大会(主催)日本出版クラブ」が開催され、出版関係者約400人が出席した。

野間省伸大会会長・日本出版クラブ会長は今次大会の委員長が女性であることと、女性の大会委員長は63年の歴史の中で2人目であると述べ、ジェンダー・ダイバーシティの推進は出版界においても大きな課題であるとした。

大会声明は喜入冬子大会委員長(筑摩書房)が朗読。今年が戦後



喜入大会委員長の
大会声明朗読

80年にあたること、戦争中の言論統制や戦後の出版活動の加速についてふれたうえで、現在の出版不況、デジタルの登場と進化を語った。そのうえで Publishing とは誰かが書いたものを公にする仕事であるとし、本の重要性と出版人の使命について述べ、声明を締めくくった(全文は下記別掲)。声明は拍手で採択された。

来賓祝辞のあと、恒例の長寿者祝賀(22名)、永年勤続者表彰(33名)があり、それぞれの代表者の謝辞に続いて、社会学者で京都大学大学院文学研究科教授である岸政彦氏が講演。自らが取り組んでいる「聞き手」を募集するというプロジェクトから生まれた大部の3冊、『東京の生活史』(筑摩書房)、『沖繩の生活史』(みすず書房)、『大阪の生活史』(筑摩書房)について、その制作にまつわるエピソードや、語りを聞き文字として残すことの意義を語った。

講演終了後、懇親会が行われ、出版にかかわる多くの参加者のにぎやかな交流が続いた。

大会声明

今年(戦後80年)になります。

戦争中は激しい言論統制が行われ、また物資不足から紙が手に入らず、出版活動はかなり制限されました。田辺聖子さんが戦争中、あまりに読むものがなくて、畳をひっくり返したとき下に敷かれていた古新聞をむきぼり読んだ、というエピソードをどこかで聞いたことがあります。それくらい人は活字に飢えていました。おそらく情報にも飢えていたでしょう。いつぼうで、書きたいことが書けないならと断筆する人もたくさんいました。

1945年に戦争が終わり、占領期にはGHQの検閲などもありましたが、出版活動は一挙に加速しました。カストリ雑誌から文学全集まで、とにかく、読みたい、書きたい、というエネルギーにあふれていたように思います。もちろん時代の趨勢もあり、そこから一直線に拡大していったわけではありませんが、みなさんもご存知のように、その後、1996年までは、基本的に出版活動は拡大成長していました。

そして以降、われわれは長く続く出版不況のなかにいます。人々が書いたり読んだりしなくなったのか、と言えばそんなことはありません。文字を使った情報交換は、ネットの登場によりむしろ飛躍的に多くなっています。単に、本を読まなくなったのです。ではなぜこういう状況になったのか。

出版は、英語では publishing と言いますが、これは public の動詞形です。つまり、公にする、という意味です。印刷技術が発達する以前、publish は、お披露目する、という意味でつかわれていて、作者自ら、人々の前で読み上げることを意味していたそうです。(高宮利行『西洋書物史への扉』岩波新書、2023年)

出版とは、誰かが書いたものをお披露目する、公にする仕事なのです。しかし、今は誰もが自由に発信できる時代であり、そういう意味では誰もがパブリッシャーになります。そうしてパブリッシュされた情報がネットにあふれている。戦争中とは逆に、人々は情報の海でおぼれそうになっているようにみえます。

そして、本を開く余裕を失っているのではないのでしょうか。しかし、だから本はもう必要ない、のではなく、いまこそ必要なのだと考えます。われわれが作っている本は、電子書籍も含めて、きちんとその質を担保しています。著者名があり出版社名があり、内容に責任を持っています。そのことの価値は、情報がフェイクだらけになっていく世界にあつて、ますます高くなっていくはずですよ。

世の中に必要であると思つた情報を広めていく、公にしていく、という使命を、われわれはこれからも変わらず果たしていく。その決意を新たに、大会声明といたします。

2024年5月7日

優良読書グループの歩み (6)

2023年度の「読書週間」に際して道府県読書推進運動協議会より推薦され、本会において表彰した全国の優良読書グループの活動報告を掲載いたします。
(順不同)

守谷の図書館を考える会

代表者 森本 菊代

茨城県守谷市

〈推薦〉

茨城県読書推進運動協議会

公民館講座「子ども本の楽しい学校」の受講生が、図書館のなかった守谷町(当時)により図書館がほしいと、1988年「守谷」の発足当時から、広報誌「風」を発行しています。

斎藤尚吾先生、竹内哲先生などに指導を仰ぎ、勉強会を重ね、「私たちの望む図書館像」を発表しました。守谷町の「図書館建設検討委員会」の委員に会のメンバー2名が選出され、住民の立場からの要望などを伝える機会を得ました。

1995年、待望の守谷中央図書館が開館後、会の名称を「図書館と歩む会」と変え、住民と図書館の橋渡しができたらと、「つく

る」「まなぶ」「考える」のグループを作つて、本の絵本作り、手袋人形作り、展不会、講演会、学習会の開催、近隣の図書館見学などは幅広く活動を続けてきました。

学校図書館でボランティア活動をしている会員が子ども向けの本の読む会を立ちあげ、ほかの地域の図書館で活動しているグループとの交流なども活発に行いました。会では、「守谷」により図書館を「会」の発足当時から、広報誌「風」を発行しています。

「読んでみよう」と話題の本や会員お勧めの本を紹介するコラムが人気でした。現在は年3回発行している「風」は、2023年9月16日号で136号になりました。2011年12月には100号記念号を発行しています。

中央図書館が2016年度から指定管理となったことで、会の名称を「守谷の図書館を考える会」に変更しました。中央図書館は2019年度からは直営に戻りましたが、名称はそのまま活動

続けています。

図書館の開館後、会員が少しずつ「布絵本」を製作し補修していましたが、ほかの地域の図書館見学でたくさんさんの布絵本に出会い、守谷にもたくさんさんの布絵本がほしいと思うようになりました。読書バリアフリーの環境整備が求められる今、赤ちゃんから高齢者までだれもが楽しめる布絵本を増やすため、2011年度に、市の助成を受けて布絵本製作グループを立ちあげました。現在、「守谷の図書館を考える会」の布絵本グループ「布玉手箱」として、月2回の活動をしています。

昨年度は8冊の布絵本その他を図書館へ寄贈することができました。



すべての市民と図書館の橋渡しを目指して

た。

今後の課題は、会の発展のためにも若い会員を増やしていくことです。

松本地域子ども文庫・おはなしの会連絡会

代表者 山本美栄子

長野県松本市

〈推薦〉

長野県読書推進運動協議会

「松本地域子ども文庫・おはなしの会連絡会」は、1976年に発足し、長年、地域の子どもの読書環境の充実のための活動をしてきた「松本地域子ども文庫連絡会」を母体とし、2008年に再編成された団体です。

1984年には松本市内23か所にまで広がった「子ども文庫」でしたが、公共図書館分館の整備とともにその数は徐々に減り、その一方で、「おはなしの会」や「読み聞かせグループ」が次々と誕生し、活発に活動するようになりました。そこで「松本地域子ども文庫連絡会」の長年の功績と歴史を継承する形で、地域では幅広く活動する団体が加わって再編成し、2023年度で15周年を迎えました。

連絡会の組織は、本会員と賛助

会員で構成し、2023年現在、本会員4団体、賛助会員10団体が所属しています。運営については、本会員が役員会を担い、事務局の松本市中央図書館と協議しながら年間計画を立て、活動しています。また、総会のほか、年数回の代表者を開いています。

事務局(図書館)と共催で行っているおもな事業は、次のとおりです。

- ・「おはなし祭り」
毎年6月開催。おはなし会、ワークショップなど
- ・「読書普及講座」
子どもの本の作家さんの講演会
- ・「バス見学研修会」
そのほか連絡会主催で、交流研修会(不定期)、自主講座(講師招へい、不定期)など、さまざまな取り組みを行っています。

毎年、「おはなし祭り」の前には事前準備会を行い、おはなしの小道具をみんなで製作し、当日実演するなど、各団体に所属する仲間同士の交流も大事にしています。

15周年を迎えた2023年度は、本会員を中心に、新たに「おはなし会ステップアップ集雲」

を年7回企画。連絡会員ほか、図書館読み聞かせボランティア、図書館職員、近隣市町村の活動者保育士さんなど、毎回30名、のべ70名が垣根を越えて集い、楽しみながら学びあい、あらたな繋がりも生まれつつあります。

活動を長年継続できているのは、公共図書館との協働によるところも大きいと思います。これからも、「学び」と「遊び」をたがいに交換し、応援しあうことを大切に、連携をいっそう深めながら、子どもたちに「本」や「おはなし」の楽しさを届けていきたいです。
(文責：おはなしの会すがのつくる 豊嶋さおり)



地域の子どもの読書に関わる団体が協力しあう

諸塚村読み聞かせグループ「え本よみ隊」

代表者 甲斐 真希
宮崎県東臼杵郡諸塚村

（推薦）
宮崎県読書推進運動協議会

「諸塚の子どもたちに、絵本の世界をもっとたくさん見せたい！」

3人のお子さんを育てるひとりからスタートした「え本よみ隊」。「え」と「よ」をあえてひらがなにしてお母さんやすさを目指した優しいお母さんの思いは、22年に渡り受け継がれています。

おもな活動場所は小学校です。月に一度、朝時間に3学年にわかれて活動しています。また、幼稚園では9月のお誕生会にあわせ、特別ゲストとして、さまざまな方法で園児たちと絵本の世界を楽しみます。

メンバーは、子育て中のお母さんやおばあちゃん、そして数年前からお父さんや地域の方々も加わっています。年齢や職種が幅広いことで、選ぶ絵本がバラエティー豊か、毎回メンバー同士の新たな発見や学びに繋がっています。

す。

これまでの歴史の中で、自治体が企画する読み聞かせのイベントへの参加や、近隣の町村の読み聞かせグループの方々との交流もあります。また、地元テレビ局のアナウンサーに小学校で読み聞かせをしていただいたこともありました。読む技術はもちろん、魅力的でパワフルな表現力に、子どもたちも私たちが釘付けになったあの時の感激は、今でも忘れることのできない貴重な体験でした。

読み聞かせの計画は、季節や行事にあわせテーマを決めることから始まります。内容も、ブックトーク、寸劇、手遊び歌、踊り、漫才などなど、なんでもありです。絵本1冊読むにも「それから」とし

と囃子を入れたり、太鼓を打って効果音を出したり、ああでもないこうでもない話しあいながら、メンバー同士とことん楽しんでいきます。

これまでの取組の中で、諸塚村の民話や民話を楽しく伝える工夫も行ってきました。『諸塚駄賃付け唄』と『諸塚茶のみ唄』という民話は、唄と踊りを交えた自作の寸劇の中で披露し、子どもたちにも先生方にも好評でした。また、民話『吉野宮物語』と『ヒヨース



絵本だけでなく、諸塚村の民話・民話も紹介

坊・秋茸作りでの出来事』はフェルトで作った大型紙芝居と朗読劇でそれぞれ披露し、昔の暮らしや人々の様子を楽しく伝えることができました。

私たちはアナウンサーの方のような技術や表現力はありませんが、個性あふれる発想力を活かし、「え本よみ隊」を立ちあげたお母さんの思いを胸に、絵本と子どもたち、絵本と地域をつなぐパイプ役として、これからも「絵本の世界」を届けていきたいと思っています。
*ヒヨース坊は諸塚村での「河童」の呼び名



■日本子どもの本研究会 全国大会開催へ

記念講演は田島征彦さん！
講座・分科会も多数予定

一般社団法人 日本子どもの本研究会は、7月27日(土)・28日(日)に「第56回 日本子どもの本研究会全国大会」を、東京都渋谷区の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催すると発表した。

今回のテーマは、「未来をひらく子どもと本―子どもの今をみつめ、ともに生きる明日を考える―」。27日は同会会長の代田知子さんによる基調報告「子どもの

■学校図書館を考える全国連絡会 集会開催へ

生成AI・タブレットの課題と活用を学校図書館現場で考える

学校図書館を考える全国連絡会は、7月13日(土)、東京都中央区の日本文書館協会で、「第27回集会 ひらこう！学校図書館」を開催する。

記念講演は東京大学名誉教授の佐藤学さんで、演題は「生成AI時代の学びと読書―学校図書館の役割を見直す―」。問題提起は日本図書館協会理事の高橋恵美子さんによる「学校図書館が抱える

参加には、参加費と事前の申し込みが必要。同会会費以外も参加できる。27日、28日どちらか1日の参加も可能。また、宿泊希望も受け付ける(先着順)。

参加方法や当日のスケジュール、講座・読書会・夜のつどい・分科会のテーマなどの詳細およびリーフレットはホームページに掲載中。参加申し込みもホームページから可能。申し込み受付は6月17日から7月21日まで。

●日本子どもの本研究会 ホームページ
https://www.jaschonken.com/

佐藤さん、高橋さんへの質問や、参加者による全国の学校図書館の現状についての報告・意見交換の時間も、予定されている。

会場での開催だが、Zoomによるオンライン参加も可能。参加には参加費と事前申し込みが必要となる。参加申し込みの締め切りは6月30日。左記のQRコードより、申し込みが可能。

●学校図書館を考える全国連絡会 ホームページ
https://www.open-school-library.jp/



事務局報告(5月)

☆4月23日〜5月12日「第66回子ども読書週間」

・4日〜5日「2024上野の森親子ブックフェスタ開催」

・7日「第63回全出版人大会 出席(ホテルニューオータニ)」

☆8日「機関紙『読書推進運動』第67号 入稿」

☆9日「機関紙『読書推進運動』第68号 責了」

☆15日「2024年度 第1回理書会 開催」

☆15日「機関紙『読書推進運動』第67号 出来」

☆15日「第54回 野間読書推進賞」候補者推薦依頼を都道府県立図書館などへ送付

☆16日「会員社へ「2024年度 定時総会」案内を送付」

☆17日「日本児童文芸家協会 各賞贈呈式 出席(スクワール麹町)」

☆18日「JBBY 50周年連続講座 日本国際アンデルセン賞作家 第1回」出席

☆20日「2024年度 第2回理事会 案内発送」

☆21日「2023年度 子どもの読書推進会議 全評監査(日本書店商業組合連合会・日本書籍出版協会)」

☆23日「第55回「読書推進賞」贈賞式 出席(赤坂プリンスクラシックハウス)」

☆24日「子どもの読書週間」クラウドファンディング最終日

☆24日「日本児童文芸家協会 各賞贈呈式 出席(出版クラブビル)」

☆27日「よたがずひこさんと打ちあわせ」

●編集部&事務局のひとこと

●鹿児島在住の弟の家は、男の子がふたり。今年、上のMくんは高校2年生、下のYくんは中学1年生になりました。Mくんの中学入学生時には、「ハリー・ポッター」全巻セットと図書カードを贈りましたが(高校入学生時は図書カードのみ)、今度はどうしたらよいものか。

●ちょうど、ゴールデンウィークに一族郎党で旅行したので、本人に聞いてみたら、「葉屋のひとこと」(ヒーロー文庫)全巻がほしい」と即答。その場にいた弟夫婦は「ラノベは、あんまり好きじゃないな」と言います。私自身は、主人公がしっかりしていますが、親が「うーん」というものを贈るのもどうか、中学生には早いのではという人もいるしなあ、少々迷いました。

●しかし、現在15巻まで刊行されている(まだまだ続刊がそうなる)作品です。文庫本15冊以上の作品を読み切る体験は、きつと、今後の読書の扉を大きく開いてくれるだろうし、親の意向より本人の希望、本屋で1巻1巻確かめながら15冊カゴに入れ、配達手続きをしました。

●でも、ちょうどはオススメの本も読んでほしいので、ルイス・サッカードの『穴』(講談社文庫)を原書とあわせて、一緒に贈りました。信じられないほど乗り越える力が主人公です。壁を乗り越える力、贈った本の表紙が並んだ写真は、15冊でほぼ身長と同じ長さ、おまけの2冊が飛び出していました。(伸)